

中国北方と南方における石敢當の比較研究

—— 山東省と福建省を例に ——

蒋 明 超

JIANG Mingchao

非文字資料研究センター 2017年度奨励研究採択者
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】「石敢當」は中国古代の習俗の一つで、一般的に道路の突き当たりや家の壁、橋の入り口などに設置される魔除けや厄除けのための石造物である。石敢當には一般的な石敢當（泰山の文字がない物）と泰山石敢當がある。具体的な出現時期と発祥地は不明であるが、石敢當は唐代末期に今の福建省南部で誕生したと考えられている。宋元時代には北方の山東泰山地域で泰山石敢當が出現した。

中国古代史料の中に、石敢當に関する事柄が頻繁に出ているが、石敢當を建てる習俗の記述を除くと、そのほとんどは石敢當の由来についての解明である。古代資料には泰山石敢當の実物及び泰山石敢當を設定する事情の記述も多くあるが、興味深いことに、泰山石敢當の由来についての記述は一つもなかった。

1970年代以後、日本でも石敢當に関する多くの書物に中国の石敢當が書かれているが、その研究は主に中国南方に限られており、単独で泰山石敢當を対象にしたものは特に行われていなかったといえる。一方で、同時代の中国の石敢當研究は、まさに泰山石敢當ブームであったともいえる。現時点では、中国においても、日本においても、石敢當と泰山石敢當を分けて比較する研究はほとんど行われていない。

本稿では、中国北方と南方における石敢當のフィールドワークを通し、先行研究の資料と併せて各地域の石敢當の様子、石敢當と泰山石敢當の割合、地域住民の石敢當に対する認識などを調査し、中国南北の石敢當にはどのような異同があるのかを究明したい。中国の地理テキストは秦嶺—淮河を境界線にして、中国南方と北方を分けている。本論文で使用する中国南方と北方はおおよそその範囲であり、必ずしも地理定義のように精確なものではない。なお、中国少数民族集住地域と山東省、福建省、浙江省など漢民族集住地域の石敢當はまた違うため、本論文では少数民族集住地域を対象外とする。調査地域は、中国北方の山東省泰山地域と南方の福建省中南部地域を選定した。

A Comparative Study of Shigandang (Ishigandou) from Northern and Southern China
—A Case Study in Shandong and Fujian Provinces

Abstract: Shigandang (Ishigandou in Japanese) are stone tablets in ancient Chinese folk tradition generally found in various locations, for example, at the end of a road, on the wall of a house, or

at the entrance of a bridge, to ward off evil or misfortune. There are two types of Shigandang: the standard type inscribed with three characters “石敢當,” and the other type additionally featuring the name Mount Tai “泰山石敢當.” The precise date and location of the beginning of these stone tablets are not known, but it is believed that Shigandang originated in what is now the southern part of Fujian Province towards the end of the Tang dynasty. Mount Tai Shigandang on the other hand developed in the Mount Tai area of Shandong Province in the northern part of the country during the Song and Yuan dynasties.

Shigandang are frequently mentioned in the historical records of ancient China. Other than descriptions about the practice of erecting the stone tablets, the records mainly discuss the origins of Shigandang. Interestingly, the ancient texts provide descriptions of Mount Tai Shigandang and the reasons for their installation, but none explain their origins.

Much of the literature on Shigandang produced in Japan from the 1970s onwards mentions Chinese Shigandang; however, this research is largely limited to the southern parts of China. It is fair to say that studies focusing exclusively on Mount Tai Shigandang have not been conducted in Japan. Meanwhile, Shigandang research in China during the same period has centered on Mount Tai Shigandang. Today, whether research done in Japan or in China, studies rarely distinguish and compare the two types of stone tablets.

This paper aims to identify the differences and similarities between Shigandang found in northern and southern China through fieldwork in both parts of the country, and presents a review of previous studies. The research will investigate the conditions of Shigandang in various regions, the ratio of the two types of Shigandang, and local residents' views of them.

Chinese geography textbooks use the Qinling-Huai River line as the boundary separating North and South China. The terms northern China and southern China in this paper, however, refer to more loosely defined regions that do not necessarily correspond to strictly defined geographical areas. It should be noted that this paper does not cover regions populated by minority groups, as Shigandang found in such areas are different from those in areas inhabited by the Han ethnic group, such as Shandong, Fujian, and Zhejiang provinces. The areas selected for research include the Mount Tai area of Shandong Province in northern China and the central and southern parts of Fujian Province in southern China.

はじめに

「石敢當」は中国古代の習俗の一つで、一般的に道路の突き当たりや家の壁、橋の入り口などに設置される魔除けや厄除けのための石造物である。中国起源のものであるが、中国以外（日本、ベトナム、マレーシア、シンガポールなど）の地域にも、石敢當がある。石敢當には一般的な石敢當（泰山の文字がない物）と泰山石敢當がある。石敢當について、具体的な出現時期と発祥地は不明であるが、推測では唐代末期に今の福建省南部で誕生したと考えられている。一般的な石敢當とは違って、宋元時代に中国北方の泰山地域で泰山石敢當という新しいものが誕生した。

筆者は「石敢當と泰山石敢當の異同」（蔣 2017:157-174）で両者の違いを論じた。その中で使用した資料はほぼ全て先行研究の資料であり、その時の筆者はまだ中国にある本物の石敢當を見たことがなかった。

本稿では、中国北方の山東省と南方の福建省における石敢當のフィールドワークを通し、先行研究の資料と併せて各地域の石敢當の様子、石敢當と泰山石敢當の割合、地域住民の石敢當に対する認識などを調査し、中国南北の石敢當にはどのような異同があるのかを究明したい。中国の地理テキストは秦嶺—淮河を境界線にして、中国南方と北方を分けている。本論文で使用する中国南方と北方はおおよその範囲であり、必ずしも地理定義のように精確なものではない。なお、中国少数民族集住地域と山東省、福建省、浙江省など漢民族集住地域の石敢當はまた違うため、本論文では少数民族集住地域を対象外とする。

I 先行研究と調査地概要

(1) 先行研究

古代史料の中に、石敢當に関する事柄が頻繁に出てくるが、石敢當を建てる習俗の記述を除くと、そのほとんどは一般的な石敢當の由来についての解説である。「石敢當」という文言が、史料に最初に登場するのは、紀元前40年頃前漢時代の史遊が撰した『急就篇』⁽¹⁾である。宋代学者施青臣の『継古叢編』と元代学者陶宗儀の『南村辍耕録』は、この習俗を『急就篇』に基づくものだと考える。明代以後は多くの学者、例えば明代の学者徐勃が『徐氏筆精』に、劉元卿が『賢奕編』に、『姓源珠璣』⁽²⁾によって石敢當を五代晋の高祖を守るために戦死した、姓名が石敢當の勇士に求めた。だが、実際『姓源珠璣』にあった勇士の名前は「石敢」であり、「石敢當」ではなかった。しかも、五代以前の唐大暦5年には既に石敢當は存在していたので、五代勇士説が誤伝であることは明白である。

古代史料には泰山石敢當の実物及び泰山石敢當を設定する事情の記述も多くあるが、興味深いことに、泰山石敢當の由来についての記述は一つもなかった。

1970年代以後、中国だけではなく、日本でも石敢當に関する多くの書物に中国の石敢當が書かれている。下野は「中国の石敢當とヤマト・琉球の石敢當」で、中国の石敢當について、浙江省と福建省を例にして説明した(下野 1989)。また、突き当たりなどの場所の獅子頭だけがある物を石敢當としたが、実際にそれが石敢當であるか否か疑問が残る。「石敢當からみた中国・沖縄・奄美」では、中国、特に台湾の石敢當習俗を述べ、沖縄と奄美地方とを比べて、沖縄の石敢當は中国色が濃いと結論付けた(窪 1998)。ほかに、『石敢當』(小玉 1999)、『民俗信仰 日本の石敢當』(小玉 2004)、「中国の石敢當を訪ねて」(有村澄子他 2005)などにも、中国石敢當の記述がある。総じて、日本研究者による中国石敢當の研究は主に中国南方に限られており、泰山石敢當を対象にした研究はあまり行われていなかったといえる。一方で、同時代の中国の石敢當研究は、まさに泰山石敢當の研究ブームともいえる。周星は「話説泰山石敢當」(周 1992)と「中国と日本の石敢當」(周 1993)を通じて、中国における泰山石敢當の現状を説明した。『泰山石敢當』は、中国各地の泰山石敢當及び泰山石敢當の神話と民間故事、さらに日本の沖縄、ベトナム、シンガポールなど他地域の泰山石敢當を述べ、中華系文化圏における泰山石敢當の大きな影響力を説明している(葉 2007)。以上の先行研究の資料からみると、現時点では中国においても、日本においても、石敢當と泰山石敢當を分けて比較する研究はほとんど行われていない。

(2) 調査地概要

調査地域として、中国北方の山東省泰山地域と南方の福建省中南部地域を選定した。その理由に、福建省南部地域が石敢當の起源と考えられており、山東省泰山地域が泰山石敢當の誕生地であることが挙げられる。さらに、『泰山石敢當』にしたがって、今でも山東省と福建省が中国泰山石敢當信仰の二大中心地域ということである（葉 2007）。具体的な調査地は山東省泰安市と福建省の莆田市、泉州市を選定することにした（図1）。

泰安市は山東省の西部に位置し、北は省政府の所在地の済南市、南は済寧市と接する。泰安市には五岳の一つである泰山があり、始皇帝をはじめ、多くの古代中国の統治者が泰山で封禪行事を行っていた。その後、泰山は“聖山”、“国山”と捉えられ、“泰山安、天下の安”の名誉を生み出した。泰安市岱岳区西南望村は都市部まで15kmほどである。村には西南望旧村、西南望村北村、西南望新村と北店子の四つの部分があり、周りの村々と比べて、一番大きな村ともいえる。村の東には泰山の“姉妹山”と呼ばれる徂徠山、西には大汶河という川があり、まさに風水の宝庫である。

莆田市は福建省沿海側の中部、福州市と泉州市の間に位置している。莆田市秀嶼区には媽祖信仰の誕生地である湄洲島がある。媽祖は中国南方で最も有名な道教の女神であるため、筆者が最初に思い出した調査地であった。湄洲島は面積が14.35km²で、莆田市都市部まで40kmほどであり、大陸海岸まで約2.9kmある。島内には宮下村、東蔡村、高朱村、蓮池村、寨下村、汕尾村、西亭村、北埭村、港楼村、后巷村、下山村など11個の行政村があり、3万8千人ほどの島民が住んでいる。

泉州市は「鯉城」、「刺桐」、「温陵」ともいい、福建省東南部の莆田市と廈門市の間にある。唐代から海港として発足、宋元時代にシルクロードの海上貿易の中心地として繁栄し、明代では琉球からの貿易船の指定港でもあった。泉州市には鯉城区、豊沢区、洛江区、泉港区の四つの区があり、今回の調査地はその中の鯉城区である。鯉城区は泉州市の中でも歴史が一番長い地域で、今でも多くの古い



図1 調査地位置図（筆者作成）

町と建築が残っている。区内には媽祖廟、土地公廟など道教施設が多数あり、ほかにも、唐代に建てられた仏教施設開元寺（現存するのは宋代の施設）と儒教施設府文廟（孔子廟）があり、いわば宗教、文化と歴史を感じさせる名所である。

II 中国北方の石敢當 一山東省泰安市を例に

(1) 山東省泰安市岱岳区西南望村における石敢當の現状

筆者の現地調査によると、2017年9月現在、西南望村全域で総計49基の石敢當の石碑があり、2015年の調査結果より3基増えた。数が多いため、本稿では西南望村に限定し、石敢當の特徴を写真などと併せてまとめた。

まず、49基の石敢當は全部泰山石敢當で、一般的な石敢當は1基もなかった。もしかすると西南望村は特例で、ほかの村には石敢當と泰山石敢當が同時に存在するのではないかの疑問を抱き、周りにある東南望村、北望村と橋溝村も歩いてみた。結果は同じく、一般的な石敢當は1基も見つからなかった。

次に、村の各部分にある泰山石敢當の基数は大きな差がある。何百年前からずっと存在していた西南望旧村では、13基の泰山石敢當がある。文化大革命前は、今よりもっと多くの泰山石敢當があったはずである。文化大革命により、西南望村旧村にあったお墓、寺、廟など、当時封建鬼神文化とされた施設がほとんど破壊された。これらの施設と一緒に破壊された泰山石敢當も多くあったはずである。北店子も大昔から存在していた小さな村である。「北店子」と呼ぶのは、この村落が西南望村の北部分にあって、かつ村全体が幾つかの店で構成されていたからである。村の中の大部分の店は馬車店であった。泰安城から泰安南部の良庄という大きな町に行く馬車隊はほとんど北店子の馬車店で食事、宿泊、馬の餌の補充などをしてきた。北店子には1基だけ、かつ西南望村全域で一番大きな泰山石敢當がある（図2）。西南望村北村は文化大革命が始まる時から建てられていた、西南望村北部の小山の上にある村落である。北村には34基の泰山石敢當の石碑がある。西南望村新村は中国政府の社会主義新農村を建設する政策によって、2005年から建てられ始まった村落である。新村にある建築物の造形は大体同じく、中国北方伝統的な四合院である。新村には1基の泰山石敢當しかない。

第三に、西南望村にある泰山石敢當の大きさと設置場所が様々で、公的な物もあれば、私的な物もあり、かつ全部道と緊密な関わりを持っている。大きさは縦20cm、横7cmの煉瓦の壁に施した物（図8 壁にはめ込んであるので奥行きは分からない）から縦128cm、横60cm、奥行き34cmの西南望村全域で一番大きな石碑まで、かなり大きな差がある。設置場所について、西南望村北村東側の一番外にある泰山石敢當だけが昔は道だった所に設置された。ほかの泰山石敢當は全てT字路、三叉路の突き当たり、あるいは不規則な十字路の突き当たりの所にある。公的な泰山石敢當（図2、図3）は全部古いもので、突き当たりの所にあり、石碑の一部が土の中に埋められている。ここで注意したいのは、私的な物、つまり各人家にある泰山石敢當である。家の入り口、家屋の一角、壁など様々な所に設置されており、具体的にいうと、低い所に設置された物もあるし、高い所にもある。一部分が土の中に埋められた石碑もあれば、壁の中にはめ込まれたものもあり、薄い石板にして壁に貼り付けられていたものもある（図4、図5、図6、図7、図8、図9、図10）。



図2 北店子村唯一の泰山石敢當 (筆者撮影)



図3 観音廟だった所にある泰山石敢當 (筆者撮影)



図4 西南望村北村にある家屋の一角の外に置いた泰山石敢當 (筆者撮影)



図5 西南望村北村にある半分が土に埋められた泰山石敢當 (筆者撮影)



図6 北村にある家屋の高い所に貼り付けられた泰山石敢當 (筆者撮影)



図7 旧村にある壁の高い所に彫り込まれた「鎮宅の宝」の刻字がある泰山石敢當 (筆者撮影)



図8 旧村にある壁中央部分の高い所に彫り込まれた、民国時代以前の煉瓦に「泰山石敢當」の刻字がある泰山石敢當 (筆者撮影)



図9 北村にある家屋の入り口の高い所に貼り付けられた「魯班」、「太公」と「鎮宅」がある泰山石敢當 (筆者撮影)



図10 西南望村北村にある家の入り口と隣の壁の高い所に貼り付けられた2基の泰山石敢當（筆者撮影）

第四に、「泰山石敢當」の刻字が色づけられた石碑も多くある（図4、図5、図9、図10）。ここで注意したいのは、刻字の色はほとんどが赤色であった。これは中国における赤色の役目と関係がある。中国では、赤は吉祥の色であるが、同時に禁忌の色でもある。吉祥の色としては、結婚式や高齢者の誕生日を祝う宴会などでよく使われている。禁忌の色としては、赤は血の色で、陽界と陰界の境界の色と目され、魔除けと辟邪の役割がある。例として、中国では、本命年の人、つまり年齢が12の倍数の人が、年間を通して悪運があるといわれる。赤い下着を身に着けていると、悪運を避けることができると人々は信じている。石碑の刻字を赤くするのも、辟邪のためである。「泰山石敢當＋赤色の字」で、魔除けと辟邪の力を増やすことができるといわれている。

第五に、全ての泰山石敢當は刻字だけの物である。『泰山石敢當』（葉 2007:72）には、北京東四三条街53号にあった、上部が獅子頭の古い泰山石敢當の写真を掲載したが、西南望村にはそのような物はなかった。さらに細かくいうと、ほとんどの石碑にある泰山石敢當の刻字は簡体字の「當」ではなく、繁体字の「當」であった。したがって、本論文にも「當」を使うことにした。多くの泰山石敢當には、「泰山石敢當」の刻字の上、あるいは両側に「鎮宅⁽⁴⁾」、「鎮宅之宝」の刻字がある（図4、図7、図9）。いくつかの泰山石敢當は「泰山石敢當」の刻字の両側に「太公到此每日好、魯班建房今日吉⁽⁵⁾」（太公がここにいるので、生活がどんどん良くなる。魯班のおかげで、今日で新しい家屋が出来上がった。）の刻字がある（図9）。「浙江民間的建房礼儀」に、浙江省では新しい家の完成のシンボルと呼ばれる棟上げ式を行う前に、いつも姜太公と魯班を祭ると書いてある（周 1992:220-221）。聞き取り調査によると、このいくつかの泰山石敢當も全て新しい家屋を建てた時に設置された。

第六に、いくつかの人家には2基、つまり複数の泰山石敢當が設置されていた（図10）。このいくつかの人家はほぼ村の外側、つまり村と外の境界の所にある。1基は突き当たり、あるいは道であった所に向かう壁に設置された。もう1基は隣の突き当たりではないが、村の一番外にある壁に設置された。

最後に、数でいうと古い泰山石敢當より、新しい物が圧倒的に多い。「石敢當と泰山石敢當の異同」（蔣 2017）に、初期の石敢當と泰山石敢當の石碑に全て年号が刻まれていたことが分かったが、西

南望村にあるほとんどの泰山石敢當には年号が刻まれていない。北店子にある泰山石敢當（図2）が古いものであるが、年号が刻まれていない。北店子で最年長の于心才さん（84歳）の聞き取り調査により、彼の曾祖父の時代、約200年前には既にこの石碑があったことが分かった。西南望村旧村にある観音廟だった場所にも一つの古い泰山石敢當がある（図3）。石碑には年号が刻まれていないが、筆者の祖父の言葉では、「観音廟と同じく、少なくとも何百年の歴史があるだろう」。旧村にあるもう1基の古い泰山石敢當は煉瓦に彫り込まれた物である（図8）。この泰山石敢當があった人家には、80歳近くの老婦人が住んでいる。石敢當を設置した年代について聞いてみると、「分からない、小さい頃から既にあった。」との返事だった。このような煉瓦は民国時代以前の模様なので、石敢當も相当の歴史があると考えられる。

（2）泰山地域住民の石敢當に対する認識

ほとんどの泰山地域住民が石敢當を知っているが、ここで強調したいのは、彼らが知っているのは一般的な石敢當ではなく、泰山石敢當のことである。聞き取り調査では話者たちの答えが一致したのも、石敢當が泰山地域で誕生したことである。ほかに、筆者が泰山石敢當由来の七つの民間故事と二つの神話伝説を集めた。民間故事内の六つは石敢當を泰山地域出身の者にする説で、残った一つは泰山石にする説である。神話伝説中の一つは石敢當を泰山靈石にする説で、もう一つは姜太公にする説である。神話伝説によると、姜太公は泰山地域出身ではなかったが、泰山山頂で封神して、自分の神位を残すのを忘れたため、泰山石敢當になった。つまり、これらの由來說も全て泰山と緊密な関わりを持っている。多くの村民たちのイメージは石敢當が泰山地域出身の者であった。残念ながら、具体的な石敢當由来を分かる人はほとんどいなかった。

従来の由來說のほか、意外と「泰山石敢當が天界の大神である」と言った人も多くいた。詳しく聞くと、ほぼ全員が「ドラマ中の石敢當はそう演じていたからだ」と答えた。ここでみんなが言っていたのは、2015年2月15日から山東テレビと貴州テレビで放送されていた『石敢當之雄峙天東』というドラマである（図11）。ここではドラマの概要を簡単に説明する。石敢當は泰山山頂にあった靈石から生まれて、邪悪な勢力と戦い、宇宙護衛者になった。後は玉皇大帝靈魂の暗闇の一面が奎剛という大魔王に化して、玉皇大帝を含める天界の神様たちを捕まえて、阿修羅界に閉じ込めたが、石敢當だけが逃げ出した。石敢當が奎剛と何度も戦って、ようやく勝ち、天界の神様たちを救った。ドラマを見終わった瞬間、主人公は石敢當ではなく、『西遊記』の孫悟空ではないかと感じた。この調査結果から、村民たちの石敢當認識がいかに足りないかが分かった。

幸いなことに、西南望村旧村の観音廟だった場所の近くに住んでいる周心得さん（89歳）から、より詳しい石敢當の情報を教えてもらった。彼の話によると、「この観音廟が村の歴史を一番に感じさせる建築ともいえる。廟内には大きな槐という木があり、根底に大人でも入れる穴があった。廟の西側に大きな鐘があった。残念ながら、槐も鐘も大鍊鋼鉄運動⁽⁷⁾の被害を受け無くなった。観音廟も長い時を経て、徐々に崩れて、文化大革命の際も破壊を受け最終的には無くなった。残ったものは、もともと観音廟前、T字路の突き当たりにあった泰山石敢當だけであった（図3）。石敢當はかつて橋溝村にいた石という姓の農民で、よく人を助け、悪いことをする人を殴る。時間が経ったら、遠い所まで有名になり、彼に助けを求める人もどんどん増えてきた。治療も上手く、多くの患者の病気は



図11 『石敢當之雄峙天東』ドラマのポスター
(百度よりダウンロード)



図12 橋溝村の石学泰夫婦（筆者撮影）

彼のおかげで治った」と言った。橋溝村は西南望村に近いので、直ちに橋溝村へ調査をしに行った。

実際に聞いてみると、橋溝村では確かに多くの石姓の人がいる。石学泰さん（84歳）は村中一番年長の石姓の人である（図12）。彼の話では、「古代には橋溝村の石氏は泰山地域で有名な一族で、宋代にはさらに宋太子の先生になった偉い人も出た⁽⁸⁾」。村の南部に石氏一族の墓地で、“石家林”という場所があり、残念ながら墓地は既に文化大革命中に破壊された。

「泰山書院之読書法」の文末で、泰山書院を含めた“泰山十二書院”の説明がある（周 2015:147-148）。十二書院には徂徠書院があり、書院の創始者は北宋初期の文人石介であった。奉符県徂徠山北部の長春嶺出身のため“徂徠先生”と呼ばれ、字が守道のため“石守道”とも呼ばれる。奉符県は古代泰安地区の名称で、徂徠山北部の長春嶺地域は今の橋溝村である。母が他界したため、石介は1038年に宋朝廷での官職を辞め、実家に戻って三年間の喪に服していた。期間中、実家で徂徠書院を開いて、人々に『易』、『春秋』などの学問を教えていた。服喪し終わったら、1042年に宋朝廷に国子監直講に任命され、実家を離れた。その後、石介は太子中允まで昇格し、徂徠書院もその間になくなった。太子中允は太子の世話をする官職で、文人である石介の主な仕事はまさに太子に知識を教えることであった。石学泰さんが話してくれた宋太子の先生である橋溝村の石氏族人と恐らく石介のことである。

徐北文が「泰山老奶奶の来歴」⁽⁹⁾で、泰山老奶奶の由来について、『泰山民間故事大観』[陶 1984]と『玉女巻』にある民間故事を引用して説明した（徐 1996）。『玉女巻』には泰山老奶奶の父を奉符県石守道、つまり石介にした説がある。『泰山民間故事大観』には、泰山老奶奶の父を徂徠山地域にいた、人助けが好き、周りの人々に尊敬された石敢當という農民にした。徐北文はこの二つの民間故事にある人物関係を整理し、石敢當が石守道であると指摘した。筆者はこの指摘に大きな疑問を持っている。石守道が文人である一方で、石敢當は農民であり、二人の人物身分には大きな差異がある。かつ、石敢當は力強い人物なので、文人の石守道と一緒にするのも相応しくない。

しかしながら、石守道のほか、古代の徂徠山地域では、確かに石姓を持つ有名な武人が多く出た。「石氏墓表」には「五代紛争の時期、石介の先祖たちは自分の武装を持ち、当地の住民を守り、泰山地域で有名であった」の銘文がある。「徂徠山」『岱覽 第22券』には「金代末期、徂徠山地域で石珪父子は自分の武装を持ち、地方の覇者になった」の記述もある（周 2015:102）。石珪が後世の人に「石將軍」と呼ばれ、ある地域では石將軍廟も建てられ、彼を祭っていた。時代の流れの中で、石將軍は誰なのかが次第に分からなくなり、住民たちは石將軍を泰山石敢當として祭るようになった。『民俗

信仰『日本の石敢當』にも「泰山石敢當」についての伝説が書いてある（小玉 2004:429-432）。伝説にある主人公は後晋時代の泰山石家林出身の姓が石、名が敢という農民であった。石家林は橋溝村石氏一族の墓地なので、その発祥地も橋溝村であった。

以上の分析からみると、泰山石敢當は泰山地域で誕生したものであると確認できる。その誕生は泰山地域、特に泰山支脈の徂徠山地域の歴史と緊密な関わりを持つ。また、泰山石敢當は福建地域発祥の一般的な石敢當と比べ、だいぶ性質が異なっている。泰山石敢當を泰山地域出身の「石敢」、あるいは「石敢當」という農民にする説や、石珪のような石姓將軍にする説もあれば、文人の石介にする説もある。こう見れば、泰山石敢當習俗が社会各階層に浸透していたことも推測できる。今では、ほとんどの泰山地域住民は泰山石敢當を知っているが、その具体的な由来は知らない。『石敢當之雄峙天東』という神話ドラマでは、石敢當を以前の由来説と全く関係がない偉い神様に仕立てた。それにしても、多くの人々がドラマの中の石敢當を受け入れて信じた。石敢當に対する認識の不足はもちろん、マスメディアの現代人に与える影響も想像以上に大きかった。

（3）民間芸能泰山影絵中の石敢當

泰山地域では泰山石敢當を設置する風習が非常に盛んで、泰山地域の民間芸能の中にも泰山石敢當のものが見られ、代表的なものに泰山影絵がある。

泰山影絵劇場へ取材を行った時に入手したパンフレットによると、明代の小説『梔杌閑評』⁽¹⁰⁾の中には、泰山影絵が書かれていた。この本のできた時期から推測すれば、泰山影絵には600年以上の歴史がある。7人以上の演者が必要な「七緊、八松、九消停」⁽¹¹⁾という中国伝統的な影絵芸能とは違って、泰山影絵は「十不閑」⁽¹²⁾の演芸方法で有名である。一人で同時にいくつかのことをやりつつ一つの影絵を演じることができる。人数が多い場合でも、二人で十分に対応できる。範正安⁽¹³⁾は泰山影絵の6代目の传承人で、「十不閑」の技ができる中国現存唯一の人である。泰山影絵は2006年に、泰山石敢當と同時に第一陣の国家レベルの非物質文化遺産に登録された。2011年に、中国影絵が世界非物質文化遺産に登録されて、泰山影絵はその代表として紹介された。範正安の代表作の一つは「泰山石敢當降妖」である（図13）。劇場へ取材しに行った時、範正安は北京に影絵展示のイベントに参加していたため、息子の範維国（図14）に聞き取り調査を行った。



図13 影絵「泰山石敢當降妖」中の泰山石敢當（左）と妖怪（右）（筆者撮影）



図14 範維国氏(右)と筆者(左) 泰山影絵劇場で(筆者撮影)

範維国の話では、「泰山石敢當降妖」は泰山石敢當に関する民間故事を題材にして作った影絵演目である。歴代の泰山影絵職人たちが集めた泰山石敢當の伝説に革新的なものを入れつつ、「泰山石敢當降妖」も絶えず変化していく。影絵中の泰山石敢當は泰山地域出身の、体が丈夫で人助けが好きな若者である。彼は修験を通して魔除けの力を得た。この力を使って、石敢當は村々で悪いことをした妖魔鬼怪と戦って、村民たちを守っていた。村の若者からも数人を選び、自分の弟子にし、魔除けの技を教えて、みんなで一緒に妖魔鬼怪と戦う。「泰山石敢當降妖」の中の泰山石敢當は、まさに一般的に認められるイメージである。「泰山石敢當習俗を宣伝することはもちろん、一番重要な目的は「泰山石敢當降妖」の影絵を通して、泰山石敢當のように善良で、悪い勢力に妥協しない、人助けが好きな人間になるべきだ」という認識を観客、特に子供たちに伝えることだ」と教えてくれた。

「泰山石敢當降妖」のほか、「碧霞元君」⁽¹⁴⁾、「西遊記」⁽¹⁵⁾、「水滸伝之武松打虎」⁽¹⁵⁾、「東遊記」など多くの泰山影絵演目がある。「碧霞元君」は中国北方、特に泰山地域で最も有名な女神である。「西遊記」と「水滸伝」は中国古代四大奇書であり、「東遊記」も道教信仰の中で最も有名な一つの「八仙」⁽¹⁵⁾についての物語である。このいくつかの有名な影絵演目の中で、「泰山石敢當降妖」が一番人気といえることから見ると、泰山地域における泰山石敢當習俗の影響力が感じられる。

III 中国南方の石敢當 一福建省を例に

(1) 莆田市湄洲島における石敢當の現状

筆者は2017年9月8日から5日間をかけて、湄洲島にある11の村で石敢當調査を行った。結果としては2基の石敢當しか見つからなかった。1基目は湄洲島東蔡村の古い部分で見つかった物である(図15)。突き当たりや橋元ではなく、村にある路地の右側に建てられていた。石敢當の後ろは大きな凹みがあり、聞き取り調査によると、昔は民家であった。石碑の上部分が広い、下部分が狭くて土の中に埋まっていた。石碑の文字の上部分ははっきりとしない、「岩敢當」、「石敢當」、「后敢當」、「山



図15 東蔡村にある石敢當(左)と隣の土地公廟(右)(筆者撮影)

石敢當」とも読める気がする。石碑の隣に一つの土地公廟がある。東蔡村村民呉金城（70歳）の話によると、「どのくらいの歴史があるかは分からないが、小さい頃からこの石敢當と隣の土地公廟は既にそこにあった記憶がある。後は周りの村民たちがお金を出して、もともと石で建てた土地公廟を新しくし、石敢當がそのまま放置された」。

2基目は曾燕峰という中学生のおかげで、港楼村にある湄洲第二中心小学で見つかった物である（図16）。筆者は港楼村で調査中に、港楼村出身のある老婦人に石敢當についての聞き取り調査を行った。彼女は石敢當について何も分からなかったが、そばで遊んでいた彼女の孫、つまり曾さんが筆者を助けると申し出てくれた。曾さんは石敢當の石碑をどこかで見た記憶があると言ったが、具体的な場所が思い出せなかった。クラスメイトや友人に聞いてみたところ、湄洲第二中心小学にあることが分かった。石碑は学校にある緩やかな坂道が平地になる所に倒れていた。曾さんの話では「湄洲第二中心小学に通学していた時、ほぼ毎日この石碑を踏んで通っていた。通行の妨げにならないように置いてあったので、あまり注意していなかった」。この石敢當は相当古い物だとひと目で分かる。石碑は標準的な長方体の形で、左下部分に欠損がある。刻字のある面の外側に沿って細線が刻まれているが、その線の上の部分に傷があり、中には「石敢當」三文字が刻まれている。曾さんに、この石碑はかつて学校隣の土地公廟と一緒にあったと教えてもらった。この学校は地方政府がお金を出して再建し、2011年7月に完成したものである。同じ時期くらいに、周りの住民たちがお金を出し、学校の隣にあった石で建てた土地公廟を新しくした。ただこの石敢當がそのまま放置され、いつの間にか今の場所に移された。

まとめると、2基の石敢當は両方共古い物で、石碑は公的な土地公廟と一緒にある、あるいはあった。土地公廟と同じく、二つの石碑も公的なものであったと推測できる。意味深いことに、東蔡村にある石敢當の置く場所は突き当たり、橋元などではなかった。湄洲島11の村に石敢當が2基しかないのも意外であった。最も意外に感じたことは、子供から老人まで、話者たちには石敢當を知っている人が一人もいなかったことである。



図16 港楼村にある石敢當（左）と共に設置されていた土地公廟（右）（筆者撮影）

(2) 泉州市鯉城区における石敢當の現状

もともと泉州市での石敢當調査は予定になかったが、湄洲島での調査を終えた時点で、2基の石敢當しか見つからなかったため、続いて泉州市に向かって調査を行った。「中国の石敢當とヤマト・琉球の石敢當」(下野 1989:492-493)に、泉州市西街 152 号に 1 基の石敢當があったと書いてあり、調べたら西街が鯉城区にあるため、鯉城区を調査地に選定した。実際に西街で探したところ、すぐその石敢當が見つかった(図 17)。西街は東西に走る、普通の道路より広い道である。西街の両側に民家が並んでいる。西街の両側に多くの南北に走る路地がある。西街の入り口の北側に開元寺という大きな古寺があるため、北側の民家は寺院の東側から建っていた。寺の関係で、西街両側の道が真っ直ぐに貫くケースはほとんどなく、大体がずれていた。この石碑は西街南側のある南北に走る道の突き当たりであった、二つの家の間の壁に彫り込まれている。石碑は壁の中に凹んでおり、上には赤色に染めた「石敢當」の刻字がある。

湄洲島の調査と同じように、すぐに 1 基目の石敢當を見つけることができ、獅子像の石碑は何基も見つかったが、なかなか石敢當は出てこなかった。周りの住民たちにも聞いたが、石敢當が何であるかということさえ知らなかった。がっかりして西街に戻ろうとした時に、ある菓子店の扉にある石敢當のキャラクターが目に入った(図 18)。キャラクター寸胴で、上部分には口が大きく開いて、二つの鋭い歯が出ている獅子頭の像が描かれており、下には「石敢當」が書かれていた。この店も西街北側の南北に走る道の突き当たりであり、石敢當の設置条件とも合致している。再び闘志を燃やして店主に石敢當のキャラクターを描いた人を聞いたが、なかなか教えてくれなかった。研究者の証明書類を提示すると、やっと安心して、この石敢當のキャラクターを描いた人がいる場所に連れて行ってくれた。後に店主がこのような態度をとった理由が分かった。この地域では石敢當など古い石碑の盗難事件が頻繁に起こっていたためである。

案内された場所は「大拾堂」という独創的な芸術品を販売する店で、店主は二人おり何冬冬と「青



図 17 泉州市西街 152 号にあった石敢當 (筆者撮影)



図 18 西街のある菓子店の扉にある石敢當のキャラクター (筆者撮影)

羊」呉鐘電という美術先生である。店に入ったら、大きな石敢當のキャラクターが目に入った。店には陶製獅子の芸術品や「惠安女」⁽¹⁶⁾の人形などの商品も販売しており、開元寺の絵なども飾られている。当日は「青羊」が不在であったため、何冬冬に聞き取り調査を行った。彼は「この地域の青年たちは、故郷の伝統文化に興味を持ち、「青社」と呼ばれる青年クラブを成立し、故郷の特色があるものを題材にして創作を行っている。石敢當のキャラクターは多くの題材の中の一つである。僕と「青羊」のほか、石敢當に興味を持つ「青社」メンバーは何人かいる」と言った。後日、何冬冬の紹介で「青牛」蘇永志、「青象」林永松、「青馬」何鵬悦など「青社」のメンバーとも知り合った。疑問に感じたことは、この前見つけた獅子像の石碑も石敢當であると彼らに教えられたことである。筆者の認識では、沖縄で見たように、獅子像の石碑と石敢當とは違うものである。残りの調査時間が余りなかったので、とりあえず「石敢當」の刻字がある石碑の情報をリクエストした。獅子像の石碑と石敢當の関係については今後の課題としたい。

最初に見つけたものは、開元寺近くの開元培元中学南の孝感巷の突き当たりにあった石敢當である(図19)。ひと目で家屋完成後壁に埋められた新しいものであると確認できる。家屋はそんなに古くないように見えるが、ドアはロックされ、扉の隙間を通して見ると、中の建築物は既に潰されていた。周りの住民に聞いたところ、その家の家族は別の場所に移ったとのことである。石碑には赤色に染めた「石敢當」の刻字だけがある。

二番目に見つかったものは、南俊路北段広平倉27号の家の外側の壁の傍に立っていた物である(図20)。家の外見はボロボロ、壁面もはがれ、古い建物に違いない。この石敢當はT字路の突き当たりであり、石碑の上部分は何かの動物の頭のように、口が大きく開き、鼻部分に二つの穴が刻まれ、頭の下には鈴の形をした物がある。石碑の下部分の正面は長方形で、真ん中部分が凹んでおり「石敢當」が刻まれていた、字跡が薄くてなんとか読める状態であり、「當」の半分は土の中に埋まっていた。しばらく待ってようやく家主が帰ってきたので、インタビューを行った。相手は許姓の老婦人で、50年ほど前に嫁いできた者である。残念ながら彼女は石敢當について、何も知らなかった。「お母様(主人の母)にも聞いたことがあったが、何も知らず、一応本村出身なので、小さい頃はもうこの石碑が



図19 開元培元中学南の孝感巷の突き当たりにあった石敢當(筆者撮影)



図20 南俊路北段広平倉27号の石敢當(筆者撮影)

そこにあった記憶があると言っていた。お母様は他界したけれども、生きていれば100歳は超えている」と教えてくれた。したがって、この石碑も100年以上の歴史があると思う。

三番目は大寺后27号にある家の出入り口側の、一筋の路地の突き当たりにある壁の傍に建てられたものである(図21)。石碑の上部は広くなっており、左角は高く右角が低く傾斜しており、下部は狭い。石碑の上部には動物の頭が刻まれ、口は大きく開き、額が丸く、顎が尖っており、一見すると、サルの頭のようなものである。下部には「石敢當」が刻まれ、「當」の半分が土の中に埋まっている。動物の頭と「石敢當」の刻字の間が折れていた。石碑のある家にいた最年長の老婦人にこの石碑の情報を何度も尋ねたが、終始避けていたようで、何も答えなかった。困っていたところ、隣家の住人が助けてくれた。彼(55歳)は劉姓で、その老婦人の弟である。「私たち、みんな同じ家族だよ。石敢當があった家と両側の家はもともとは一つだった。俺の祖父(1888年生まれ)は昔、この土で家を建てた。後は祖父の息子たちに本来の土を分け、三つの家を造った。真ん中の家は本家で、両側の家は分家である。この石碑は恐らく祖父が辟邪のために建てたと思う。本家にあったが、この石碑はみんなの物で、三つの家の守り神だ」と教えてくれた。1990年代の「旧房改造⁽¹⁷⁾」のため、古い家屋を潰してしまって新しい家屋を建てる際、この石碑が壊れた。本家が自分の家を潰す時に壊したので、老婦人は何か悪いことが起こるのかとずっと心配して、この石碑の話に一切触れたがらない。彼に石敢當は何物かを聞いたら、「分からない、祖先が建てたものだから、私たちは家を受け継いだが、石碑の詳しい情報は何ももらわなかった。辟邪の役割があると知っているけれども、石敢當は何物かはさすがに知らない」と答えた。

四番目は南門水巷万寿路4号泉州富美宮という廟の出入り口にある人家の土地公の祭壇の下にあった石敢當である(図22)。土地公廟はT字路の突き当たりにある。石敢當はその下にあるもう一つの煉瓦で造った祭壇に固定されていた。石碑は斜めに置かれていて、上部はしゃがんでいる石獅子で、下部は石の角柱である。角柱はほぼ煉瓦に埋まっているため、中のものが何も見えない。その人家に



図21 大寺后27号の動物の頭がある上部が折れた石敢當(筆者撮影)



図22 万寿路4号の土地公の祭壇下にあった上部が獅子像の石敢當(筆者撮影)

いる最年長の人に石碑の情報を尋ねたところ、「祖先が建てた物なので何も知らない。富美宮の方に聞くと分かるかもしれない」と勧められた。富美宮の長老は呉姓の老人であった。彼の言葉によると、富美宮は500年以上の歴史があり、中には前漢名臣簫太傅（簫望之）をはじめ、多くの文武両道の王爺が祀られている。富美宮の王爺信仰⁽¹⁸⁾が、特に近くの住民たちに信仰されている。富美宮は道教系の施設なので、土地公信仰と石敢當にも詳しい。呉さんは石敢當が辟邪のものであると知っていたが、具体的な情報が分からず、「石碑がずいぶん前から既にそこにあって、前代の富美宮にいた方の勧めで設置したものかもしれない」と教えられた。

五番目は清軍驛52号にある家門の隣の壁に貼り付けられた物である（図23）。家屋と石敢當の外見が新しく見え、入り口に開運祈願の札も貼り付けられ、伝統文化雰囲気十分に感じられる家である。石碑は人工石材の造りで、長方形の上部の両角が対等に削られ、上部には八卦が刻まれ、八卦の真ん中には「太極」の刻字があり、下部は「石敢當」の刻字がある。ドアを何度か叩いたところ、家主が出てきてくれた。開いたドアを越しに、屋内の真ん中にある祖先の位牌が祀られた祭壇が見えた。この石敢當の情報を聞いたら、意外にも家主が非常に不愉快そうな顔して、直ちに切り上げようとした。何度もお願いしてようやくインタビューを引き受けていただき、僅かな情報を入手した。「この石碑は2年前に辟邪用に購入して設置したもので、買った場所は既に忘れた。家の前には高層マンションがあり、建築物の左下部分にマンションの前後を貫くトンネル様の通路がある。家が通路の突き当たりであり、風水では良くないので、この石敢當を建てた」と教えてくれた。

六番目は「青社」のメンバーである林永松が今年（2017年）、突き当たりであった西街117号で開いた店の入り口の傍に置いた泰山石敢當である（図24）。この石碑は前述したものとは違って、泰山の登山道両側の商店で販売している泰山石敢當の芸術品と非常に似ており、山の形の石を滑らかにし、正面には赤い字で「泰山石敢當」と書かれていた。店が突き当たりであり、風水では良くないと友



図23 清軍驛52号の八卦、太極がある石敢當(筆者撮影)



図24 西街117号の山の形をしている記念品の泰山石敢當(筆者撮影)

人に言われ、煞気止めのため、石敢當を設置することにしたらと教えてくれた。泉州市で買うつもりだったが、当地のいくつかの石工に頼んだら、石敢當の専門知識がないため、そのような物を造ってあげることができないと拒否された。仕方がなく、わざわざ泰山に行ってこの石碑を購入した。泉州市に戻り善縁堂（道観）に行って、そこの尼さんに頼んで石碑の開光儀式、いわば道教式御霊入れ式を行った。彼の話によると、ただ石碑をそこに置くだけでは何の効果もなく、「開光点眼」の法事を通して石碑に魂を吹き込んで始めて呪力が生じるということである。開光したとしても、直ちに石碑を設置するのではなく、吉日を調べ、縁起の良い日を決め、その日に設置する。泉州市では石敢當を設置する時、常にこのような正式な手順を踏むのかと聞くと、「そうだ。福建人はすごく風水を信じているし、儀礼的なことをしっかりやらないと本当に罰が当たるよ」と教えてくれた。

(3) 福建地域住民の石敢當に対する認識

これまで見てきたように、莆田市湄洲島では今でも媽祖信仰と土地公信仰が盛んであり、ほとんどの人家には媽祖と土地公が祀られ、各村にも必ず公的な媽祖廟と土地公廟がある。湄洲島で見つかった2基の石敢當はいずれも公的な土地公廟と一緒にあった。石敢當と土地公とはどのような関係であるかを聞いてみたが、残念ながら話者の中で石敢當は知っていても関係についてまで知る人はいなかった。「村政府の知識人に聞いてください」と言われたが、港樓村など村政府に確認しても結果は同じであった。

泉州市鯉城区の場合も同様で、「青社」メンバーと出会う前に、多くの人たちに聞き取り調査を行ったが、石敢當を知っている人はいなかった。「青社」メンバーのおかげで多くの石敢當を見つけることができたが、石敢當、特に古い石敢當があった人家に住んでいる年長者でも、自分の家にある石碑は何物かさえ知らなかった。新しい物の場合、五番目の石碑の持ち主は石敢當の辟邪の役割しか分からなかった。六番目の石碑は「青社」の林永松が設置した物である。彼の言葉から分析すると、石敢當は専門的な知識、特に道教や風水と緊密な関わりを持っているらしい。「青社」メンバーは石敢當に興味を持っているけれども、泉州市の伝統文化として取り扱い、具体的な由来はあまり分からない。石敢當に一番詳しい「青牛」蘇永志であっても、当地の石敢當由来の民間故事と民間伝説などを聞いたことがない。彼らは泰山石敢當を石敢當の一種類と理解し、泰山石敢當由来の民間故事と神話伝説などについては知らなかった。

IV 中国南北の石敢當の比較

以上、中国北方の山東省泰安市と南方の福建省莆田市湄洲島、泉州市鯉城区における石敢當調査の成果を述べた。これからはほかの研究者の中国各地方における石敢當調査の資料も踏まえ、中国南北の石敢當習俗の異同をまとめたい。

(1) 共通点

日本と中国における先行研究と自分の調査データと合わせてみると、中国各地方の石敢當を設置する場所はほぼ一致しており、大体T字路、L字路、三叉路、あるいは少しずれた十字路の突き当たり

などである。設置する方法も土の中に埋めるとか、壁に彫り込むとか、壁に貼り付けるなど様々である。石敢當の大きさも多種多様、高さは2、3mくらいの石造りの物もあれば、煉瓦で造った、たった15cmほどの小さな物もある。ほとんどの石敢當には年号、つまり石碑を設置した時期が記されていない。どこの石敢當も辟邪の役割があり、その効果を増すために、常に石碑に刻まれた字を赤色に染める習慣がある。

(2) 相違点

山東省泰安市岱岳区西南望村で見つけた49基の石敢當は全て泰山石敢當であった(表1)。また、『泰山石敢當』[葉 2007]にある山東省東南部の臨沂市費県崗子村、山東省北方の済南市朱家峪村、山東省東部の青州市井塘村、さらに北京などの地域の石敢當調査のデータを参考にすると、まれに石敢當があるものの、そのほとんどは泰山石敢當であった。「話説泰山石敢當」に、山東省各地に泰山石敢當が普通に見られ、1930年代中国東北地域で行った石敢當調査のデータから、石敢當と比べ泰山石敢當が多かったと述べた(周 1992:257-258)。「中国の石敢當を訪ねて」に、山東省蒙陰県で見つけた6基の石敢當中の4基は「泰山石敢當」、1基は「泰山鎮宅石」、1基は「泰山神石鎮宅敢」であったとある(松田 2005:17-18)。「泰山鎮宅石」「泰山神石鎮宅敢」は「泰山石敢當」と間違えて造られた物であると考えられる。以上のデータを踏まえると、中国北方では一般的な石敢當より、泰山石敢當が圧倒的に多いと判断できる。南方の福建省莆田市は史料に記録された最古の石敢當の出土地であるが、筆者は同市湄洲島にある11の村々で必死に探したものの、2基の石敢當しか見つからなかった。泉州市鯉城区で見つかった石敢當を加えても、8基だけであった。ほかには、下野が中国浙江省温州市で見つけた6基の石敢當は全て泰山石敢當であり、寧波市、杭州市と紹興市では1基も見つからなかった。福建省泉州市では西街152号にあった1基しか見つからず、廈門市で見つけた4基はいずれも石敢當の刻字がない獅子頭のものであった。莆田市の3基のうち1基は石獅子、2基は石敢當であった(下野 1989)。これらの石敢當、泰山石敢當、獅子頭のもを全部加えても、山東省泰安市岱岳区西南望村にある石敢當基数の半分に満たない。

(a) 石碑自体について、中国北方の石敢當はごく簡単で、文字だけの物が多い。「泰山石敢當」の刻字はもちろん、その周りにはたいてい「鎮宅」「鎮宅の宝」などの字が加えられている。まれに「太公」「魯班」と「鎮宅」が同時に書かれた泰山石敢當もある。「鎮宅」の「宅」は家屋で、新築を建てる時も「太公」と「魯班」を祀る習慣があるので、泰山石敢當は建築物と緊密な関係があることが分かる。南方の石敢當は、「石敢當」「泰山石敢當」と書かれた物があると同時に、何の刻字もないが、当地の住民たちに「石敢當」と呼ばれている石獅子もある。刻字の内容からみると、中国南方では、ほとんどの石碑には「石敢當」、あるいは「泰山石敢當」とだけあり、ほかの文字はない。なお、中国北方と違って、南方では刻字のほかにはたいてい八卦や太極図(図23)、獅子像(図22)、獅子面、特に口に剣をくわえた獅子面、虎面など辟邪の力を持つものの一つ、あるいは複数を石碑に加える(表1)。

(b) 石碑の設置場所からみると、中国南北では全部石敢當を壁に彫り込んだり、壁に貼り付けたり、壁の外に置いたり、あるいは土の中に埋めたりするが、その高さは若干異なる。南方の石敢當はほとんど低い位置にある。けれども、北方では壁の外に立つ、あるいは土の中に埋める場合は、無論石敢當も低い位置にあるが、壁に彫り込んだり、貼り付けたりする場合は南方と違って、常に泰山石敢當

を高い位置に設置する(表1)。なぜ泰山石敢當を高い位置に設置するか石碑の持ち主に聞いたところ、「鎮宅」のためと教えてくれた。低い位置にあった泰山石敢當にも「鎮宅」と書かれていたのではないかと疑問を呈すると、「泰山は高い山だから、当然感覚的に泰山石敢當も高い位置にするでしょう」「泰山⁽¹⁹⁾山頂、五岳独尊など日常言葉のように、泰山はいつも高いイメージがあるので、泰山石敢當もその影響を受けたんじゃないか」などの推測みたいな答えしかもらわなかった。一人だけ、程樹林(70歳)という老人から、土地を鎮める方法と家屋本体を鎮める二つの「鎮宅」法があると教えられた。残念ながら二つの鎮宅法の原理については彼も分からなかった。地を鎮めると言ったが、壁の低い位置に設置された、地面と接触しない泰山石敢當もある。そのような石碑の近くにある人家の住人に聞いたら、「この場所は「地盤(基礎)」と呼ばれる。地盤とは地下に造るものと、地面以上まで建てるものがある」と言った。地盤を地上まで造り、その上で家屋を建てる家も多くある。この「地を鎮める」の「地」は「地盤」のことであり、地盤を鎮めると、その上に建てた家屋にも悪いものが入ってこられないため、泰山石敢當を低い位置に設置したのではないかと考える。また、西南望村調査で撮った、高い位置にあった泰山石敢當の写真を全部見てみると、図6、図7、図8、図9、図10のように石碑の位置と、家の門の棟がある位置とは大体同じ高さにあることに気付いた。「話説泰山石敢當」(周 1992)と『泰山石敢當』(葉 2007)に掲載された、高い位置の泰山石敢當の写真を確認してみても、結果は一致した。ほかに、葉濤の本に載っている「姜太公在此」と「泰山在此」の石碑及び紙護符も泰山石敢當と同じくらいの高さの位置にあったことに気付いた。「泰山在此」と「泰山石敢當」とは字が違うほかに役割がほぼ同じなので、「姜太公在此」と「泰山石敢當」の融合により出来たものではないかと考える。「浙江民間的建房礼儀」に、浙江省では棟上げ式を行う前に、いつも姜太公と魯班を祭る習俗があると説明した(周星 1992)。また、筆者の調査で、西南望村など泰山地域と、湄洲島及び泉州市鯉城区など福建地域にも、門と家屋の棟の所に「姜太公在此」の紙護符を置く習俗があることが分かった。棟は家屋本体の一番重要な部分と目され、「姜太公在此」の紙護符はまさに代表的な棟のまじない用の鎮宅法である。長い歴史の中「姜太公在此」と「泰山石敢當」、二つの鎮宅用の習俗がお互いに融合し、「姜太公在此」を石碑にするようになり、「泰山石敢當」を家屋の棟の高さの位置に設置するようになり、「泰山在此」の石碑も出来たのではないかと推定している。姜太公が泰山石敢當である神話伝説も二つの習俗の混同ではないかと考える。しかしながら、なぜ南方では石敢當を家屋の高い位置に設置せず、「姜太公在此」を石碑にする例もなかったのか(表1)。

(c) 調査で知り得たもう一つの発見は、中国南北共に泰山石敢當は読み方が同じであるが、実は同じ物ではないということだ。前述した通り、泰山地域住民にとって、泰山石敢當は泰山地域で生まれた人物、つまり泰山の石敢當である。『泰山石敢當』では河北省民俗学会編『風俗通 1992年第三期』雑誌にある河北省唐県の泰山石敢當の民間伝説を引用している(葉 2007:150-151)。概要は、「長春真人」丘処機⁽²⁰⁾が唐県に布教しに行った折、同じ山東地域出身の友人「石敢當」も一緒に連れていった。石敢當はよく人助けをしたため、唐県の住民たちは彼を崇拜し、彼の名前を石碑に刻み、突き当たりに置くようになった。石敢當は泰山地域出身なので、「石敢當」刻字の前に「泰山」を加えた。よって、北方の泰山石敢當は泰山に属する性格がある。これに対して、南部(福建省泉州市鯉城区)の住民たちの理解では、泰山石敢當は「泰山+石敢當」という形で組み合わせ、一般的な石敢當より呪力がさらに大きい物とのことである。「中国の石敢當とヤマト・琉球の石敢當」に説明がある中国浙江省

で見つかった6基の石敢當は全部泰山石敢當で、その解釈は「泰山」と獅子像、八卦などと同じく、石敢當にぶち込んだ物とみなした（下野 1989:497-501）。また、同論文にある、廈門市にあった4基の石敢當のうち、3基は突き当たりにあった獅子廟に祀られた獅子、1基は突き当たりにあった人家の壁の傍に立てられた獅子像であった（下野 1989:489-492）。「青社」の方々も突き当たりにある石獅子を石敢當と見なしている。沖縄での調査で石敢當と石獅子とは別物だと知ったが、「石敢當」の刻字がない獅子像を石敢當にするとは見当がつかなかった。そうする理由を把握している人物、あるいはそれについて書いてある論文も見つからなかったため、今後の課題にして研究したい。ここで確認できることは中国南部の泰山石敢當が石敢當に属し、この「泰山」が獅子頭、八卦などの符号と同じく、必ずしも泰山に属する性格があるというわけではない。つまり、南部の泰山石敢當は一般的な石敢當だからこそ、「姜太公在此」習俗との融合ができなかった。では、南部の石敢當と北部の泰山石敢當とはどこが違うのか。

思った通り、同じ辟邪用の物であるが、北部の泰山石敢當は「鎮宅」、つまり住宅を鎮める方法でその役割を果たす。これに対して、南部の石敢當は「止煞」、つまり突き当たりなど地点の煞気を止める手段で辟邪する。『風水和民宅』に『古今図書集成 678 卷』を用いて、民宅が突き当たりであった場合は「泰山石敢當」を設置する鎮宅法があるとの記載がある（尚、張 1992:52-53）。注意したいのはここで書いたものは一般的な石敢當ではなく、泰山石敢當であることだ。西南望村の泰山石敢當と『泰山石敢當』（葉 2007）に掲載された北方の泰山石敢當には頻繁に「鎮宅」の刻字が出てくる。「鎮宅」の刻字がなくても、西南望村での聞き取り調査によると、おおかた全て鎮宅用のものであった。逆に、一般的な石敢當にしても、泰山石敢當にしても、筆者が福建省で見つけたものと『泰山石敢當』（葉 2007）、「中国の石敢當とヤマト・琉球の石敢當」（下野 1989）及び「話説泰山石敢當」（周 1992）に掲載された南方の石敢當の写真には、「鎮宅」の刻字があるものは一つもなかった。聞き取り調査によると、福建地域は風水のことを大変重んじている、石敢當は風水の「気」の流れが悪い所に設置され、「邪気」払いするものである。つまり、南方の石敢當は風水術的な属性が強く、主な役割は煞気除けであり、鎮宅の効果はあまりない。だからこそ、同じ鎮宅用の北方の泰山石敢當と棟のまじない用の「姜太公在此」とは融合しやすく、南方の石敢當はほとんどその影響を受けなかった。

調査地	山東省泰安市岱岳区西南望村	福建省莆田市湄洲島、 泉州市鯉城区
石敢當の総数（基）	49	9
一般的な石敢當の数（基）	0	8
泰山石敢當の数（基）	49	1
動物の頭、八卦などがある石碑の数（基）	0	4
文字だけある石碑の数（基）	49	5
高い所にある石碑の数（基）	28	0
「姜太公在此」と併刻された石碑の数（基）	2	0

表1 山東省泰安市岱岳区西南望村と福建省莆田市湄洲島、泉州市鯉城区にある石敢當状況の比較

(d) さらに北方の泰山石敢當より、南方の石敢當は風水知識などの専門性が高く、タブーとも言える。西南望村にある泰山石敢當のほとんどは村民個人で購入、あるいは石工に頼んで造り、自分で設置したもので、儀式的な活動は行われていなかった。『泰山石敢當』に、泰安市石横二村では泰山石敢當を造る時、夜間に鶏冠の血と朱砂などを混ぜて刻字に塗る儀式を行うとある（葉 2007:137）が、これも村民たちが自主的にやったことである。福建省泉州市鯉城区で聞き取り調査を行った時、「答えたくない」、あるいは「触れたくない」という話者がいた。特に図 21 のように石敢當が折れている場合など、その家の住人は祟りを恐れ、筆者の質問も避けて、石敢當のことは一切触れようとしない。図 24 のように、林永松が複数の石工に石敢當の製作を頼んでみても、普通の石工が勝手に作れるものではないと断られたケースもある。石敢當を買えたとしても、また道士に、あるいは尼に頼んで開光儀式を行わなければならない。最後は石敢當の設置も吉日を選び、その日にする。『泰山石敢當』には、福建省の道士が石敢當と石獅子の開光儀式を行う時に使うテキストも掲載してある（葉 2007:138-142）。『石敢當からみた中国・沖縄・奄美』には、台湾地域での石敢當の設置に際し、風水師が大きく影響していることも説明している（窪 1998:440-443）。

おわりに

以上の説明のように、中国南方と北方における石敢當と泰山石敢當の現状は大きな差異がある。中国北方の石敢當はそのほとんどが泰山石敢當であり、泰山地域の属性が強い。泰山石敢當はおびただしい数があり、現在も人々に知られている。幾つかの民間伝説のほか、泰山影絵などの民間芸能にも泰山石敢當の物語が見られる。その一方で、中国南方では石敢當と泰山石敢當は同時に存在するが、普通には見られない。石敢當を知っている人もほとんどいなかった。泰山石敢當と混同する状況も目立つ。

中国南北の石敢當の設置場所は地理的に同じなので、その根本的なもの、つまり風水原理によって置く条件は変わらない。だが、南方の石敢當は、その風水の吉凶判断が地形を重んじるため、風水師など専門家しか設置することができない。設置する前も通常宗教者を頼んで、開光儀式を行い、吉日を選定する。これに対して、北方の泰山石敢當は誰でも造ることができ、開光儀式もほとんど行わない。泰山石敢當を生産する商家もあり、自分で家の壁に「泰山石敢當」の字を書くケースもある。

南方とは違って、北方では一般的に泰山石敢當を家の壁の高い所に設置する。それは南北の石敢當の役割に微妙な違いがあるからである。中国南北の石敢當を設定する目的は全部辟邪であるが、厳密に言うと、その目的を達成する手段がそれぞれ違う。南方の石敢當は、風水で判断する際、外形や地勢を重視する。T字路など、いわば「気」が良くない所に石敢當を置けば、悪い「気」を変えることができる。「気」は高い所から低い所に流れるので、低い所の邪気を止めるとよいのである。よって、南方の石敢當の辟邪手段は「煞気除け」であり、「煞気除け」の範囲がその点に集中するため、石碑は普通低い所にある。北方の泰山石敢當も突き当たりにあるが、辟邪の範囲は建物本体にまで広がった。低い所にある泰山石敢當は建築物の「地盤」を鎮める方法、つまり「地鎮」を通して「鎮宅」の役割を果たす。高い所の泰山石敢當は大体建築物の棟と門の棟と同じ高さくらいの所にあり、棟のまじないを通して「鎮宅」する。これは「姜太公在此」の影響を受けたと考えられている。また、泰山

影絵「泰山石敢當降妖」を含め、泰山石敢當の神話、民間伝説の大部分は（中国の）妖怪、鬼を払う物語である。つまり、北方の泰山石敢當の主な役割は「煞気除け」というより、「魔除け」である。突き当たりなどの地理的な境界は「この世」と「あの世」の境界でもある。上から下に流れる「気」と比べ、妖魔鬼怪は何処にも侵入できるため、家全体を保護した場合のみ魔除けの効果が期待できる。よって、「地盤」及び「棟」に近い場所に泰山石敢當を設置し、家全体を守るのである。

さらに細かく言うと、読み方が同じであるとしても、南方と北方の泰山石敢當はまた違う。北方の泰山石敢當は「泰山」と「石敢當」は一体で、泰山地域の属性がある。一方で、南方の泰山石敢當は「泰山」と「石敢當」を分けるものであり、風水説、陰陽五行説などによると、「泰山」には「石敢當」の呪力を増やす役割がある。これらを解明するには、膨大な量の実証が必要となるので、別の機会に論じたい。ほかに、「これまでの中国南北の石敢當の現状、またその要因」、「南北各地域における現代と昔の石敢當の異同」などの疑問も、本論文ではまだ解明していない。今後の課題にしたい。

注

- (1) 『急就篇』とは、初心者の識字及び書法速習のための書物であり、頻出漢字を姓名の形で列挙したものである。
- (2) 五代は、中国の唐の滅亡から北宋の成立までの間に、黄河流域を中心とする華北を統治していた五つの王朝（後梁、後唐、後晋、後漢、後周）である。
- (3) 媽祖は道教の神の一つで、天后、天上聖母とも呼ばれ、中国の航海守護の女神である。中国南方の海岸地方や台湾、日本でも沖縄県と関西地方にその信仰がみられる。
- (4) 鎮宅は民俗活動の一つで、法術、護符、法器などを使って、家屋安全のためのまじないをする方法である。
- (5) 太公（姓は姜、氏は呂、字は子牙）は、軍事長官である師の職に就いていたことから、「師尚父」とも呼ばれる。一般的には「太公望」という呼び名で知られ、釣りをしていた逸話から、日本ではしばしば釣り師の代名詞として使われる。
- (6) 魯班は、春秋時代の魯の国の著名な工匠で、木工技術に大きな貢献をし、当時中国の木工技術を相当高いレベルに押し上げた。中国大工の開祖と呼ばれる。
- (7) 大鍊鋼鐵運動は1958年からの3年間、鋼鐵の大増産を目的に、中国全土で展開された原始的な土法炉を用いた製鉄運動である。鍊鋼鐵用の鍊瓦採取のため、数多くの寺院、廟、塔などが解体・破壊された。
- (8) 太子は中国古代封建政権における皇帝の跡継ぎで、王位を継ぐべき皇子のことである。
- (9) 泰山老奶奶は碧霞元君の俗称で、中国北方、特に華北地方の泰山信仰で最も信仰されている道教女神である。
- (10) 『梔杌閑評』は明代末期の古典歴史小説で、著者は不詳である。明代の宦官魏忠賢の悪行を改編してできた小説である。魏忠賢は中国明代の宦官で、皇帝を傀儡にして実権を握り恐怖政治を敷いた最悪の宦官の権力者であり、既に危機的な状況にあった明の滅亡を加速させた。
- (11) 「七緊、八松、九消停」とは、伝統的な影絵を演じる時のことわざで、少なくとも7人は必要で、7人の場合は少し忙しくなり、8人の場合は余裕があり、9人の場合は人手が余ることである。
- (12) 「十不閑」とは、影絵芸能を演じる時、銅鑼、太鼓、板、弦など楽器の操作を全部一人で行い、頭、手、足、五官を同時に使って、影絵を上手く演じる特殊技術のことである。
- (13) 範正安氏は1945年に生まれ、山東省泰安市の出身である。8歳から泰山影絵5代目の传承人の劉玉峰氏に師事し、今では泰山影絵の6代目の传承人である。
- (14) 武松は「水滸伝」に登場する英雄の一人で、「武松打虎」とは武松が景陽岡で人食いの虎を殴り殺した事跡である。
- (15) 八仙は中国道教の仙人の中で最も代表的な存在であり、日本における七福神のようなものである。八仙と

- は何仙姑、韓湘子、藍采和、李鉄拐、呂洞賓、鐘離権、曹国舅と張果老のことである。
- (16)「恵安女」とは、福建省泉州市恵東半島沿岸の女性を指す。綺麗な花紋のバンダナを首に巻き、黄色い笠をかぶっている。特色がある服装と勤勉さで有名である。
- (17)「旧房改造」は都市化の一環として居住環境を整備するため、中国の各都市で行っている老朽家屋を改築するプロジェクトである。
- (18) 王爺信仰は道教信仰の一つである。中国のある地域では疫病がはやるのは悪い神様が暴れているからと信じられており、民衆たちは船を造り、王爺の像を乗せて疫病を海に流す行事などを行う。
- (19) 泰山頂の本来の意味は、重いものを頭にかけることであるが、今はストレスがたまる、あるいは大きな打撃を受ける状態を指す。
- (20) 丘処機は丘長春、「長春真人」とも呼ばれ、道教の一派「全真教」の開祖王重陽の後継者として、教派を隆盛に導いた人物である。

参考文献

(日本語)

- 小熊誠 1992「石敢當小考」福田アジオ編『中国江南の民俗文化—日中農耕文化の比較』国立歴史民俗博物館
- 窪徳忠 1998「石敢當からみた中国・沖縄・奄美」『東アジアにおける宗教文化の伝来と受容』第一書房
- 小玉正任 1999『石敢當』琉球新報社
- 2004『民俗信仰 日本の石敢當』慶友社
- 下野敏見 1989「中国の石敢當とヤマト・琉球の石敢當」『ヤマト・琉球民俗の比較研究』法政大学出版局
- 周星 1993「中国と日本の石敢當」佐野賢治編『比較民俗研究』第7号 比較民俗研究会
- 福田アジオ 1999『中国浙南の民俗文化—環東シナ海（東海）農耕文化の民俗学的研究』神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科
- 松田誠 2005「中国の石敢當を訪ねて」有村澄子他編『鹿児島民具』第17号 鹿児島民具学会
- 山里純一 2003「石敢當覚書」『日本東洋文化論集』第9巻 琉球大学法文学部

(中国語)

- 蔣明超 2017「石敢當と泰山石敢當の異同」佐野賢治編『比較民俗研究』第31号 比較民俗研究会
- 蔣鉄生 呂継祥 2005「泰山石敢當研究論綱」『民俗研究』民俗研究雑誌社
- 尚達翔 張正武 1992『風水与民宅』山西人民出版社
- 史遊（漢代）1989『急就篇』岳麓書社
- 陶陽他 1984『泰山民間故事大観』文化芸術出版社
- 葉濤 2007『泰山石敢當』浙江人民出版社
- 葉濤 劉曉 2007「泰萊山区石大夫信仰考察」『民間文化論壇』民間文化論壇編集部
- 周星 1992「話説泰山石敢當」福田アジオ編『中国江南の民俗文化』日本国立歴史民俗博物館
- 1992「浙江民間的建房礼儀」福田アジオ編『中国江南の民俗文化』日本国立歴史民俗博物館
- 周郢 2015『名山古城—泰山・泰安文史拾零』五洲传播出版社